3．3年保育4歳児R児

中田　幸江

R児は3年保育児である。うさぎ組の時から、どのような状況にあっても自分の思いを表出することは十分にできる。だが、まわりにいる友達の思いに気づいていながら、自分の思いのみを通そうとしがちであるため、トラブルに発展することが多い。今後、友達の思いを少しずつ受けとめ、自分の思いと友達の思いを考えて葛藤する姿が見られることを願っている。

事例1「だって、R児も使いたかったもん」（4歳児）　4月19日（水）

R児とZ児はすみれ組に設定してあった製作コーナーで、思い思いに自分のつくりたいものを製作していた。その時、R児の大きな泣き声が聞こえてきた。教師が振りむいて見ると、膨れっ面をしたZ児がプリンカップを手にして、大泣きしているR児を見ていた。

教師　「R児ちゃん、どうしたの？」
R児　「・・・・」（涙を必死に止めようとしている）
教師　「Z児ちゃん、怒ってるの？」
Z児　「（うなずく）だってR児ちゃん、Z児が最初取ったプリンカップ取ったんだもん」
教師　「そうだったの。Z児ちゃんが先に取ったんだ」

教師の話をさえぎって、

R児　「だって、R児も使いたかったもん」
教師　「ふーん。R児ちゃんも使いたかったんだね。R児ちゃんもZ児ちゃんもこのプリンカップ使いたかったんだ。だからけんかになったのね」

R児もZ児もうなずく。

教師　「困ったね、どうしたらいいかな・・・」
T児　「じゃんけんすれば」

傍らでこのやりとりを見ていたT児が言った。

教師　「じゃんけんすればだって。R児ちゃん、じゃんけんする？」
R児　「・・・・」

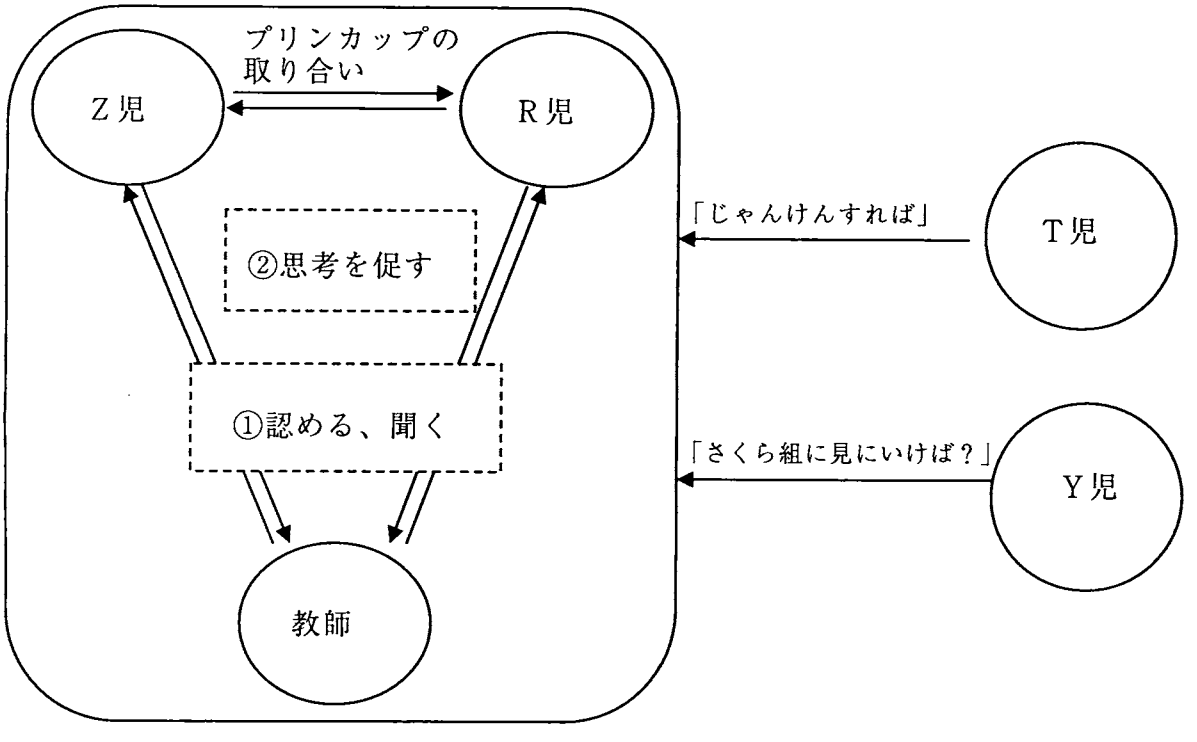
教師　「Ｚ児ちゃんはじゃんけんする？」
Ｚ児　「・・・・」
Ｙ児　「さくら組に見にいけば？」

だまって下を向いていたＲ児の顔が上を向き、さくら組に向かって走り出した。すみれ組で待っていたＺ児と教師のもとへ、Ｒ児がプリンカップを手にして戻ってきた。

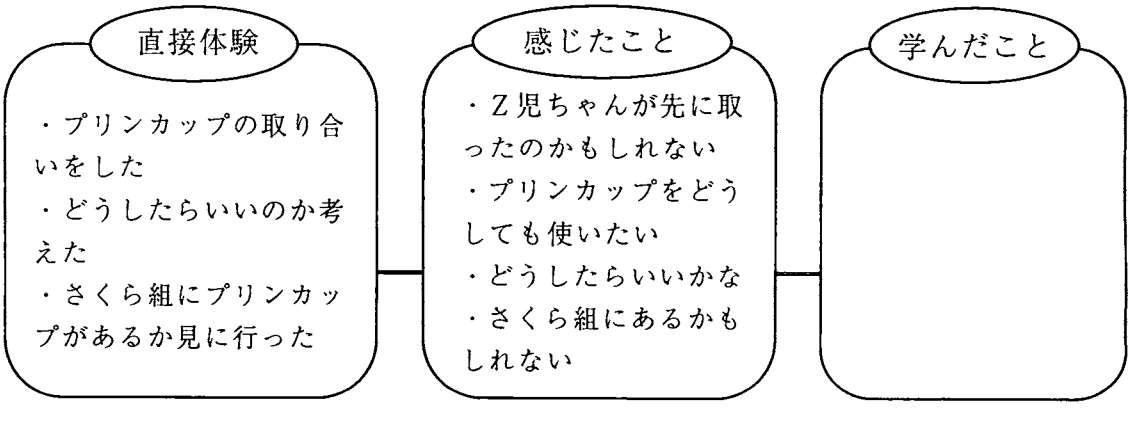
教師　「さくら組にあったのね。Ｒ児ちゃん、このプリンカップでいいの？」

Ｒ児は満足そうにうなずき、製作コーナーに戻っていった。その様子を見て、Ｚ児も製作コーナーへと戻っていった。

＜かかわり＞



○社会的側面の学びの様相



○R児の育ちについて

R児は「だって、R児も使いたかったもん」という言葉からうかがえるように、最初にZ児がプリンカップをとったことを認めることができたと思われる。状況を客観的に捉えられたからこそ、カップは先に使おうとしていたZ児のものであることを潔く認められた。

年少児の時には、とにかく自分が使いたいと思ったものは何がなんでも奪い取っていたR児であった。本事例のように状況を客観的に捉えることができ、自分が行動（さくら組にカップを探しにいった）したことはR児の成長を証明している。

○環境の構成について

保育室に製作コーナーを設置し、室内での遊びに限定したため、今回のトラブルが発生したと思われる。また、年少時によくしていた遊びであるおうちごっこをしており、R児、Z児ともによく似たイメージで遊んでいたこともトラブルの原因になった。

○教師や友達のかかわりについて

教師はトラブル発生に至るまでを十分に見ていたわけではなかったため、まず取り合いに至るまでの状況を確認した。その過程でR児、Z児はそれぞれの立場でしか見ていなかった状況を冷静に捉え、自分の思いだけでなく友達の気持ちを知ることもできたと思われる。

これまでのR児やZ児の育ちを考えると「どうしたらいいのか」を考えるより、とにかく「自分がそのプリンカップを使いたい」という思いでいっぱいであるため、解決策を考えるには至らないだろうと考えた。今後、自分達でトラブルを解決していくためにはいろいろな方法が考えられるという経験を積むことが大切である。そこで、近くによってきた幼児らを含めて、解決策を考える場を設定した。

○今後に向けて

R児が友達にも思いがあることを受け止め、友達の思いと自分の思いを考えて葛藤することを願っている。自分の思いと友達の思いを表出する場を保障し、どのような解決の方法があるのか、考えさせる機会を設けていきたい。

事例２　「Ｒ児、考えたんだよ」（４歳児）　６月６日（火）

みんなのお弁当の準備がそろそろ終わったころ、Ｒ児の「うーーーん」という声が聞こえてきた。オレンジグループのテーブルに座っているＨ児がＲ児の髪をひぱっている。

教師　「Ｈ児ちゃん！Ｒ児ちゃん、痛そう」

Ｈ児は手をはなそうとしない。

教師　「Ｈ児ちゃん！手をはなしなさい。髪をひっぱるのはやめてちょうだい」

Ｈ児は口をへの字に結んで、ようやく手をはなした。
しかし、足もとをみるとお互いの足を踏みあっている。

教師　「Ｈ児ちゃん、Ｒ児ちゃんね、痛そうな顔してたよ」
Ｈ児　「・・・・（ぷいと横を向く）」
教師　「よっぽど、いやなことがあったんだ。どうしたのかな、教えて」
Ｈ児　「Ｈ児、ここに座りたい・・・」
教師　「この場所に座って、お弁当を食べたいのね」
Ｒ児　「Ｒ児もここがいいもん」
教師　「わかった。二人ともここがいいんだね、どうしようか？」

二人ともどうしたらいいのかを考えていたが、解決するには時間がかかりそうだった。そこで、Ｒ児とＨ児以外、準備ができた幼児は先にお弁当を食べることにした。

教師　「Ｈ児ちゃん、Ｒ児ちゃん、みんなお弁当の準備できているから、先に食べてもいい？」

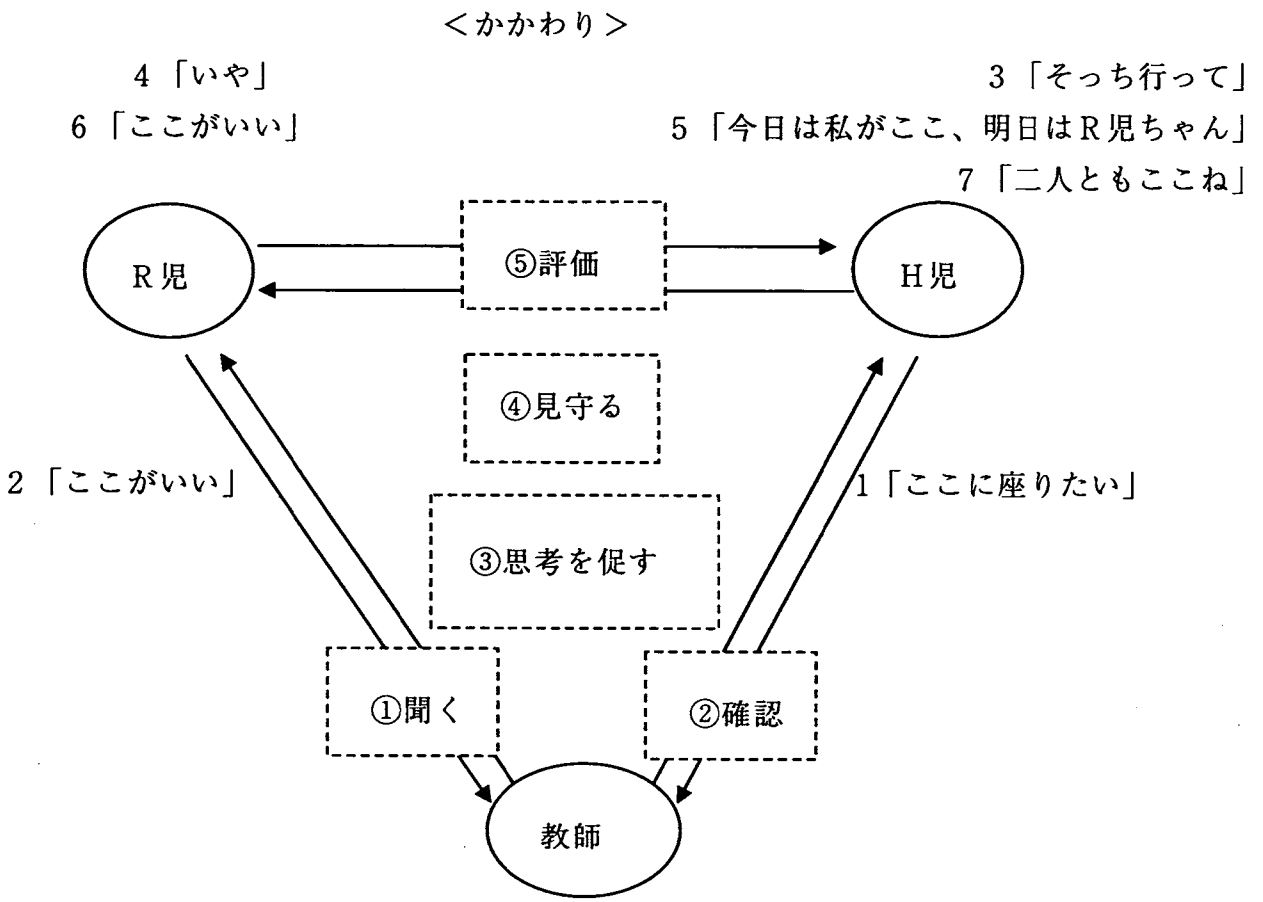
Ｒ児は　「いいよ」と答え、Ｈ児はうなずいた。

Ｈ児　「もうちょっと、そっち行って」（Ｒ児をおしながら）
Ｒ児　「いや」
Ｈ児　「・・・・わかった。今日は私がここで、あしたＲ児ちゃん」
Ｒ児　「（少し考えて）ここがいい」
Ｈ児　「いいこと考えた、二人ともここね」

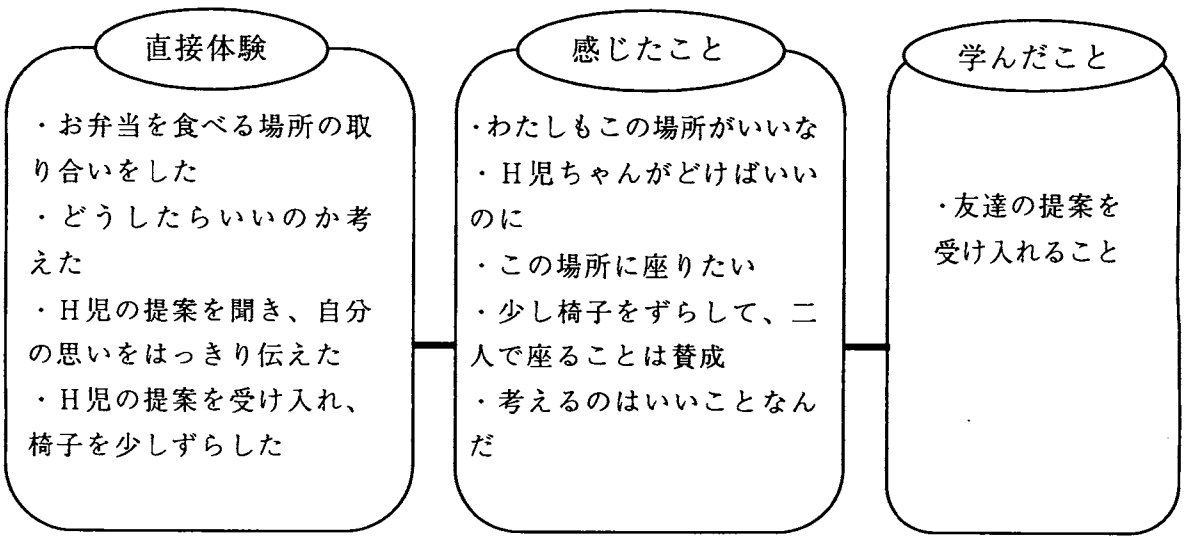
二人ともお互いに少しずつ椅子をずらし、狭いスペースにお弁当の準備をし始めた。

教師　「あれ、ここに二人で座ることにしたんだ、よく考えたね」
R児　「R児、考えたんだよ」
教師　「ほんと、R児ちゃんもH児ちゃんもよく考えたね。おいしいお弁当食べようか」

お弁当の準備をしているH児もうれしそうな表情だった



○社会的側面の学びの様相



○R児の育ちについて

R児とH児は誕生日が近く、物事への興味や関心がよく似ているため、二人の間にはトラブルがとても多い。これまでに何回も二人のトラブルを見てきたが、R児が自分の思いで突っ走り、H児が我慢する立場になることが多かった。しかし、本事例ではR児が自分の思いをおさえながらH児の提案を聞き、最終的には受け入れている姿に彼女の成長を感じた。

○環境の構成について

本事例は幼児みんなにとって楽しみにしている場で起こった。R児、H児以外はお弁当の準備ができており、お弁当を食べることを楽しみにしていた。教師はその雰囲気を大切にするために、R児、H児に先にお弁当を食べることを伝えた。このように二人だけで話し合う場を設定したことが、R児とH児を向き合わせることにつながった。周りの友達がお弁当を食べていることがはっきりとわかるので、何とか二人で考えを出し合って解決しないといけないという気持ちにさせたと考える。

○教師や友達のかかわりについて

まず、二人のトラブルの原因をつかもうと思い、トラブルに至ったいきさつを聞いた。その過程でR児もH児も十分にそれぞれの思いを表出できたのではないかと思う。二人ともC児のとなりに座りたいと思っており、なかなか座る場所が決まらないので困っていることがわかった。

次に自分たちで座る場所を決めるためにはどうしたらよいのかを考えてほしいと願って、思考を促す言葉をかけた。思考を促す言葉をかけた後は二人のやりとりをそばで見守ることにした。なぜなら以前、R児とH児がものの取り合いになった時、自分達だけで上手く折り合いをつけている姿が見受けられたからである。今回もなんとか自分達で解決できることを願って見守るというかかわり方をした。

最後には、二人でよく考え、互いの思いを叶える方法で解決したことを認めた。

○今後に向けて

R児はH児に対して上手く折り合いをつける方法を学んでいると思われる。おそらくR児はこれまでH児とトラブルをくり返しながら、一緒に生活する楽しさを感じてきている。H児が嬉しいと自分も嬉しくなるという関係になりつつあり、それが本事例のように、共に満足するような解決に至ったと考えている。しかし、R児はH児以外の幼児に対しては自分の思いを押し通そうとし、上手く折り合いをつけられない。R児が誰に対しても自分の思いを押し通すだけでなく、話し合って折り合いをつけたり、時には我慢して譲ったりしていけるように援助していきたい。

事例３「なかったら、Ｊ児ちゃんのぶんつくって！」（４歳児）　９月７日（木）

Ｊ児は魔法の杖をつくるために製作コーナーにいた。その時、同じ思いでＲ児も製作コーナーへと来た。Ｊ児が新聞紙のスティックにハートをつけようと思ってハートの型紙を取ろうとした時、Ｒ児がハートの型紙を先にとった。

Ｊ児　「それ（型紙）、Ｊ児ちゃんが使ってたんだよ」
Ｒ児　「Ｒ児も使いたい」
Ｊ児　「わたしの！Ｒ児ちゃんだめ」

Ｊ児はＲ児が持っている型紙を無理矢理ひっぱろうとした。Ｒ児はすかさず自分の背中に手をまわし、型紙をかくした。

Ｊ児　「わたしの！」
Ｒ児　「わたしの！」

Ｊ児は泣きながら、自分の型紙だということを訴えている。

Ｊ児　「わたしの！」

しまいにＪ児はＲ児のほっぺたをバッチーンとたたいた。

教師　「痛いね、Ｒ児ちゃん」（真っ赤な顔をしている）
教師　「Ｊ児ちゃん、Ｒ児ちゃん痛かったと思うよ」
Ｊ児　「だって、Ｊ児ちゃんが使ってた型紙とったんだもん」
教師　「Ｊ児ちゃん、先生ずっと見てたんだけど・・・まだ、使っていなかったよ。使おうと思ってたんじゃない？」
Ｊ児　「・・・・（うなずく）」

教師　「Ｒ児ちゃんもこの型紙を使おうと思ったんだよね。困ったね。どうしよう」
Ｒ児　「さくら組、見に行ってくるわ」

Ｒ児は型紙を握りしめて走って行った。
Ｒ児は両手をふり、さくら組に型紙がなかったことを知らせた。

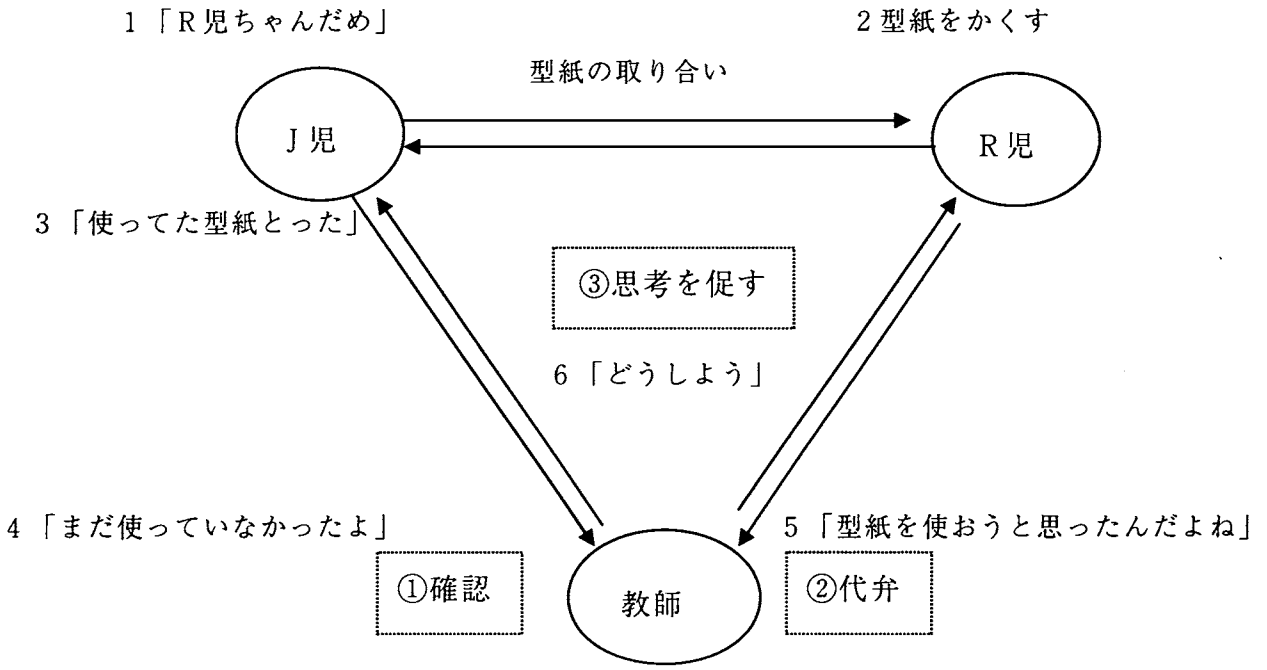
教師　「すみれ組にこの型紙と同じものなかったかな？」
R児　「見てみる」
教師　「なかったら、どう・・・・」（言い終わらないうちに）
R児　「なかったら、J児ちゃんのぶんつくって！」
教師　「なかったらね、わかりました」

R児は同じ型紙を探しに製作コーナへ走って行った。

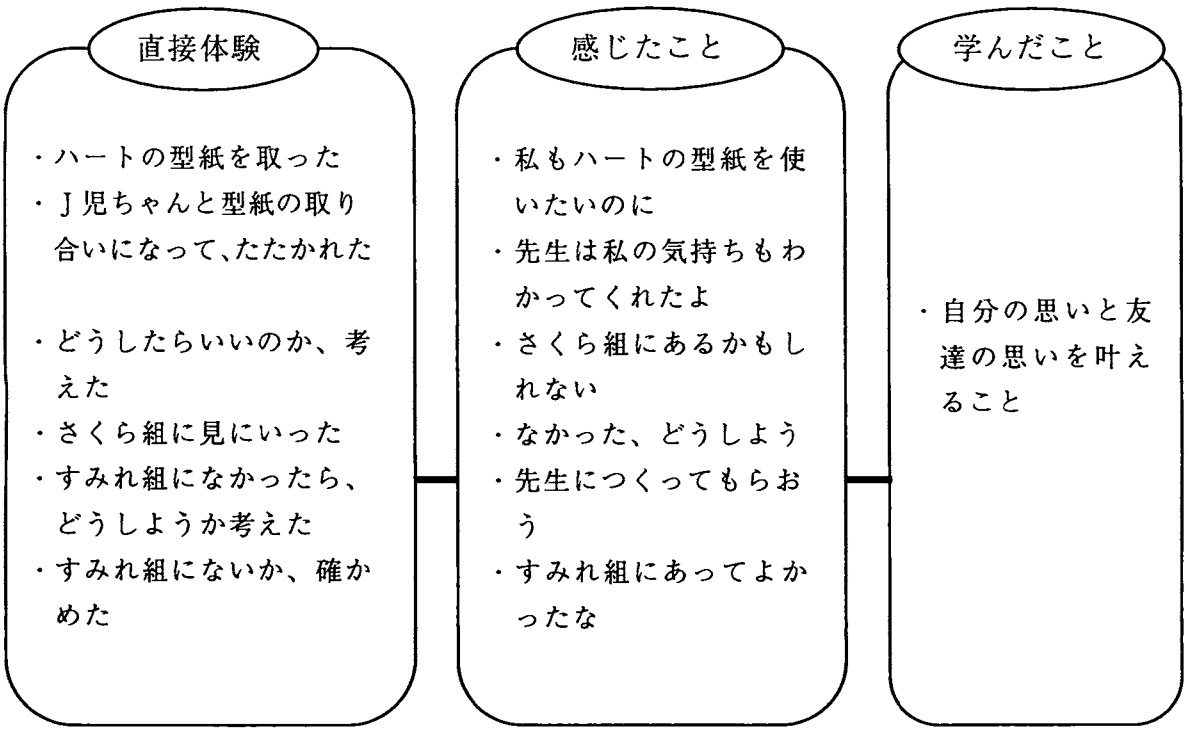
R児　「あった！」

J児はありがとうとにっこり笑って、R児から型紙を受け取った。

＜かかわり＞



○社会的側面の学びの様相



○R児の育ちについて

R児はこれまで友達とトラブルになると言葉だけでなく、たたくこともたびたびあった。しかし、夏休みがあけた頃から友達をたたくことがなくなってきた。語彙が増え、自分の思いを言葉で十分表現できるようになったからだろう。また、自分が使いたい型紙を手中にし、J児に対して優位な立場にいたため、たたくのを我慢できたとも考えられる。

しかし、そのような立場にあったとしても、さくら組に見に行ったり（R児は事例1で学んでいる)、すみれ組にない場合には友達の分もつくるように教師に頼む行為から、自分の思いと友達の思いを叶えようとするR児の思いが感じられる。さらに、型紙をJ児に渡した時、J児が満足している表情を見せたことによって、R児は友達の思いも叶えることができた自分の行為を評価できたのではないかと考える。

○環境の構成について

これまで同じアイテムを媒介とし、友達とイメージを共有して遊ぶ楽しさを感じる活動をしてきた。したい遊びでもお姫様になり、ハートがついたスティックを持ってイメージを共有しているようである。この時期はお姫様になって遊ぶ女児が増え、ハートの型紙を使用することが多くなってきた。しかし、意図的にハートの型紙を2つしか準備していなかったため、トラブルが発生したと思われる。

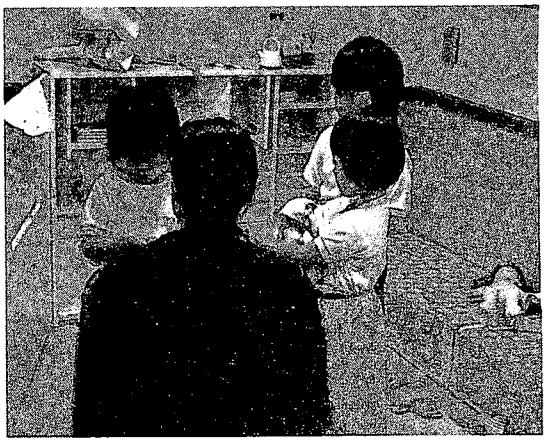
○教師や友達のかかわりについて

本事例と同じような経験をＲ児は以前にも経験している。教師はきっとその時の行動が活かせる思い、思考を促すような言葉をかけた。案の定、Ｒ児はさくら組に型紙がないかを見に行った。しかし、Ｒ児は型紙が見つからなかったと知らせたので、すみれ組にないのか、探してみるように促した。それは、Ｒ児やＪ児にこのようなトラブルが起こった場合には、自分たちで解決できる方法をいくつか知っていてほしいという思いがあったからである。今後、型紙の取り合いになったらすみれ組も探すという選択肢もあることをＲ児は学んだであろう。このようにいくつかの選択肢があると自分の思いだけに固執することなく、お互いの思いを叶えようとする気持ちの余裕もうまれてくるように思う。

しかし、教師が型紙がなかったらつくるという姿勢を見せたことによって、Ｒ児は困った場合には最終的に教師がなんとかしてくれるということを学んだとも考えれる。今後、Ｒ児に友達の思いを考えて葛藤することを願うならば、このような選択肢を与えるべきではないことを反省させられた。

○今後に向けて

Ｒ児が自分の思いで突っ走ることなく、友達の思いも考えて葛藤する場面を保障していきたい。



事例４「やっぱり、だめだった」（４歳児）　10月12日（木）

さくら組のテラス付近で、Ｅ児とうさぎ組Ｙ児（二人は姉妹）がボールや型に土を入れて、ケーキをつくっていた。Ｒ児が何か言いたそうにＥ児とＹ児の方へよっていき、ベンチに置いてあった泡立て器を貸してほしいといった。

Ｒ児　「これ（泡立て器）、貸して」

Ｅ児はだまったままケーキづくりを続け、Ｙ児はじっとＲ児を見つめた。

Ｒ児　「貸して」

もう一度言ってみるが、返答がない。そこでＲ児はＹ児のそばにあった泡立て器を取ろうと手を伸ばした。

Ｅ児　「これ、Ｙ児ちゃんの！」（Ｒ児の手を制止しながら）
Ｒ児　「まだ今日、１回も使ってないんだよ」

教師はうなずいて、Ｒ児の思いを受け止めた。
Ｒ児の大きな声を聞きつけたＨ児が近づいてきた。

Ｈ児　「これ（お茶碗）、使っていいよ」
Ｒ児　「（ちらっとお茶碗を見て）「これ（泡立て器）がいいの！」

Ｅ児やＹ児に向き直って、きっぱりと言った。
Ｈ児はお茶碗をその場に置いて去って行った。

教師　「Ｙ児ちゃん使っているしね・・・どうする？」

教師はその場から少し離れ、そこからＲ児が考えている姿を見守った。
Ｒ児はしばらく考えていたが、お茶をのんでくると教師に告げて一人で保育室へ入って行った。

それから５分後、Ｒ児は砂遊びをしている友達の様子を見ながら、保育室から出てきてた。そしてＨ児が貸してくれたお茶碗に土を入れて遊び始めた。

教師　「あれ、そのお茶碗を使ったんだね」
Ｒ児　「・・・(うなずく)」(土を入れながら)

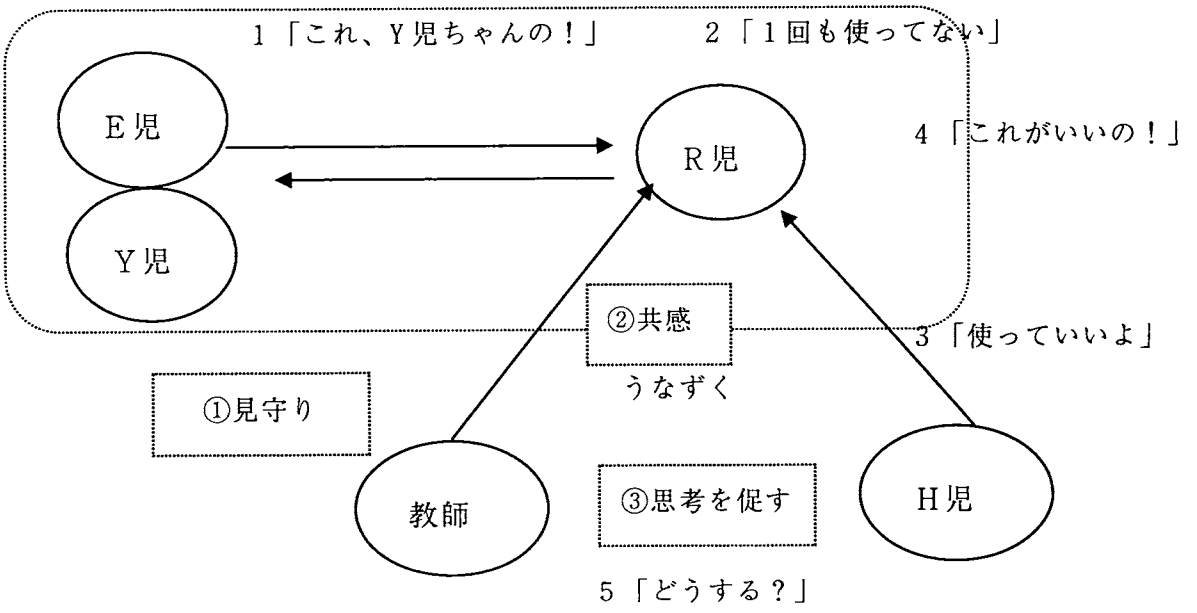
その様子をじっと見ていると、Ｒ児がお茶碗をもって勢いよく立ち上がった。

Ｒ児　「おいしいケーキのできあがりーーー」

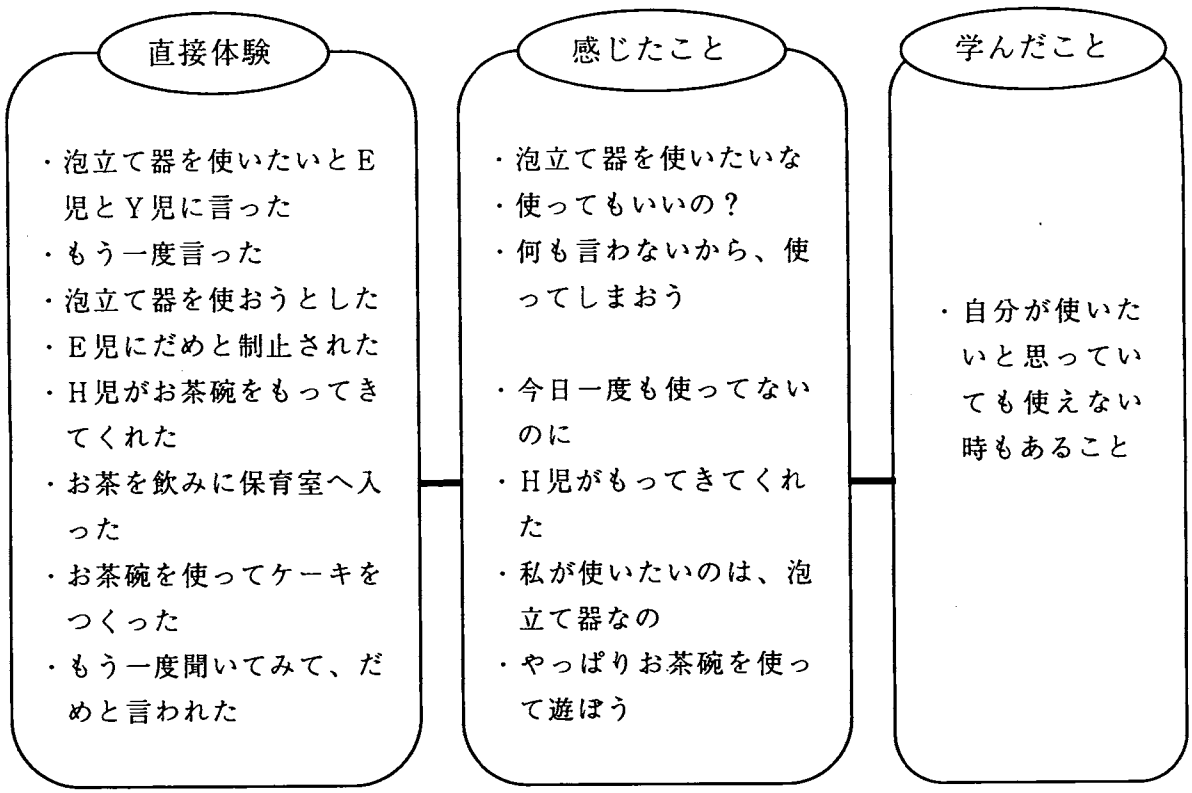
かたづけの時、Ｒ児に泡立て器を使えたかどうか尋ねたところ、

Ｒ児　「やっぱり、だめだった」と答えた。

＜かかわり＞



○社会的側面の学びの様相



○R児の育ちについて

R児は4歳になってから、友達と物の取り合いを何回も経験してきている。それは主に室内遊びの時に発生し、プリンカップや型紙、ペンの取り合いなどである。これらの経験を通して、R児は自分の思いも友達の思いも叶えられる行動（友達のためにさくら組に同じプリンカップがないか見に行くというような行動）を学んできている。しかし、本事例においてR児ははじめて泡立て器を使いたいという自分の思いをおさえることができたと思われる。

本事例でお茶碗をもってきてくれたH児とは共に3年保育で、仲良しである。仲良しのH児がR児の気持ちを汲み、お茶碗をかしてくれたことが悶々としていたR児の心をしずめ、考える余裕をもたらしたのではないかと思う。

○環境の構成について

本事例は、泡立て器が1つしかなかったこと（代替になるものが全くなし）、さらにR児の着替えが遅かったために使おうと思っていた泡立て器をとることができなかったことで発生したと考えられる。

この日は遊びの場を外だけとし、保育室は使わない場所と決めてあった。だれも保育室にいなかったため、R児にとって自分の心と向き合える空間となったのであろう。

○教師や友達のかかわりについて

R児はこれまで4歳児の友達と物の取り合いになることが多かった。「さくら組に見に行けば？」といった友達の提案や友達の譲歩によって、いつも自分の思いは叶えられてきた。本事例では、自分の思いと友達の思いを受け止めて葛藤し、時には自分の思いを引っ込めることも学んでほしいと思って援助した。

うさぎ組Y児とE児はいつも一緒に遊んでいて、E児が言葉の少ないY児の思いを代弁することが多い。仲良しの二人組に対して、R児は一人である。したがって、教師はR児の心のよりどころとなるようにR児の話を共感しながら聴く立場をとった。

R児に考えせるような言葉をかけ、教師から何も提案をしないでその場を去ったことがR児に考えさせるきっかけを与えたと思われる。また、仲良しのH児がお茶碗をもってきてくれたこともR児が自分の心と向き合う大きな援助となったのだろう。

○今後に向けて

R児が自分の思いと友達の思いを考えて、葛藤する場面をもっと保障していきたい。

事例５「遊ぶ時間なくなるもん」（４歳児）　　12月８日（金）

すみれ組のレストランで遊んでいた教師にＪ児の泣き声が聞こえてきた。おうちごっこのコーナーへ近寄っていくと、Ｊ児はＲ児が持っている青いりぼんを指さし、自分も使いたいと訴えている。Ｕ児はＪ児の側でどちらの話も聞こうとしていたが、二人とも「自分が使いたい」の一点張りで困っていた。

教師　「どうしたの、Ｕ児ちゃん」
Ｕ児　「Ｒ児ちゃんが持ってるりぼん、Ｊ児ちゃんも使いたいって」
Ｊ児　「Ｊ児ちゃん、ねこになりたいからそのりぼんを使いたいの」
Ｒ児　「だめ！Ｒ児が使うの」
教師　「Ｊ児ちゃんはねこになりたいから、そのりぼんが使いたいんだって。Ｒ児ちゃんはどうして使いたいの」

Ｒ児はりぼんを持っているので、話し合いに集中できないようだった。

教師　「Ｒ児ちゃんがお話聞けないみたいだから、このりぼんをあずかります」

教師　「Ｒ児ちゃんがりぼんを使いたいのはどうして」
Ｒ児　「これ（チュール）を止めるの。お母さんになりたいの」
教師　「なるほど、二人ともちゃんと使いたいわけがあるんだ」
Ｕ児　「だったら、先にＲ児ちゃんが使って、その後Ｊ児ちゃんが使えばいいんだよ」
Ｒ児　「いや。今日Ｒ児はずーーっと使いたいんだもん」
Ｊ児　「私も今日ずーーっと使いたいの」

このやりとりを見ていたＭ児が近くに寄って来た。

Ｈ児　「じゃあ、じゃんけんは」
Ｒ児　「いや」

Ｊ児も首を横に振りながら、いやと言っている。

Ｍ児　「じゃあ、あっぷっぷで決めれば。笑わなかった人がりぼんを使うの」

Ｒ児もＪ児も首を横に振りながら、いやと言っている。

U児、H児、M児はもうお手上げといった感じで、自分たちの遊びに戻っていった。

教師　「お友達が考えてくれたよね。でも、どのやり方もいやなのね。先生もその他のやり方、思いつかないな。今度は自分たちでお話してみて。お話が終わるまで先生がりぼんをあずかるね」

教師は二人の側で会話を見守ることにした。

R児　「じゃ、タフロープで青いりぼんつくろう」
J児　「つくれないよ」
R児　「私、つくるから。J児ちゃんがそれ（つくったりぼんのこと）を使えばいいんだよ」
J児　「いや。（また、泣き出しながら）R児ちゃんが使えばいいじゃん」
R児　「いや」
教師　「どちらも使わないものをつくってもね。R児ちゃん、自分が使いたくないものをつくってJ児ちゃんに押し付けるのはおかしいよ」

教師はレストランの遊びに戻ろうとした。その時、R児が教師についてきた。それを見て、J児もついてきた。

教師　「お話は終わったの？ついてきても、りぼんは渡せないよ」

しかし、R児もJ児もついてくる。後ろを振り返ると、二人ともぴたっと止まる。

教師　「まだ、ついてきてるの？」

R児はにこっと笑った。
何度かそれをくり返しているうちにR児はついてくるのをやめ、おうちごっこのコーナーに戻っていった。

教師　「R児ちゃん、行っちゃったね。りぼんはいらないのかな、聞いてみようか」

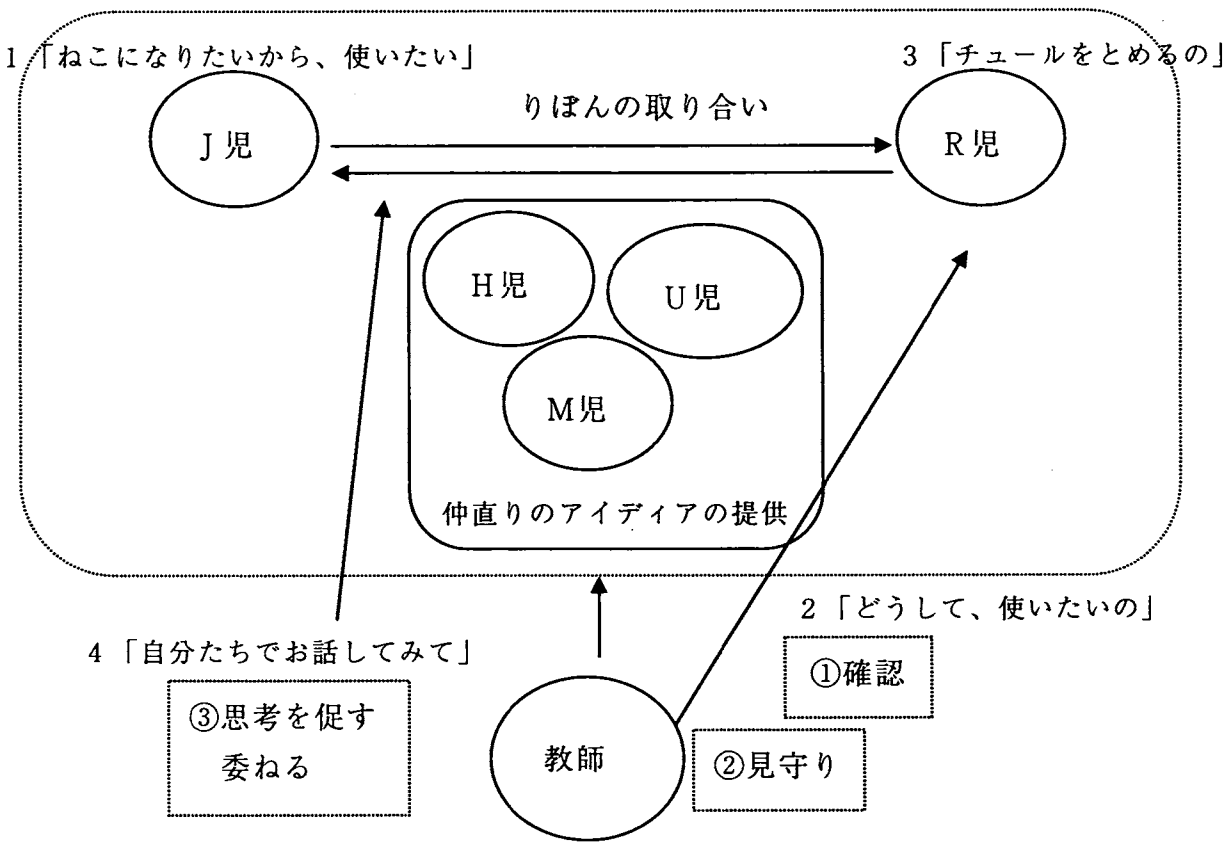
後ろにいたJ児とR児の遊んでいる所へ行った。

J児　「R児ちゃん、りぼん使っていいの？」

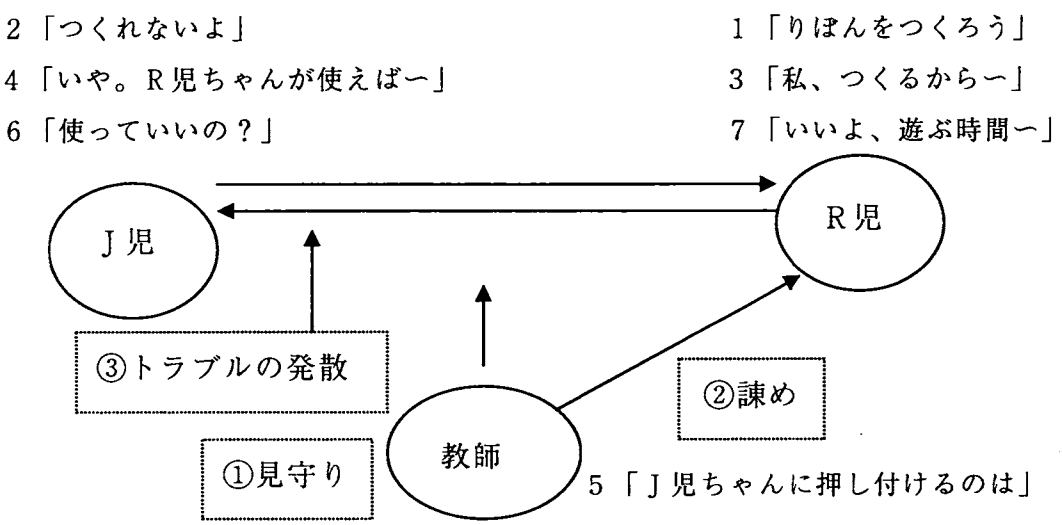
R児 「（笑いながら）いいよ。遊ぶ時間なくなるもん」
J児 「じゃ、今度R児ちゃんが2回使っていいよ」

J児も笑顔になって、一緒におうちごっこに戻っていった。

＜かかわり＞



＜二人のかかわり＞



○社会的側面の学びの様相

直接体験	感じたこと	学んだこと
・J児とりぼんの取り合いをし、無理矢理とった ・先生にりぼんを取られた ・先生にもう一度「どうして使いたいのか」聞かれた ・U児に交代で使えばいいと言われた ・H児にじゃんけんで決めればいいと言われた ・M児にあっぷっぷで決めればいいと言われた ・先生にJ児と話すように言われた ・自分でつくるといった ・J児がいやだといった ・先生についていった ・先生に「りぼんを渡さない」と言われた ・先生に何度もついていった	・私がりぼんを使うんだからね ・お話聞こうかな・・・ ・チュールを止めるのにぜったい使いたいの ・いや、ずっと使いたい ・負けたら使えないから、じゃんけんしないよ ・笑ったら使えないから、しないもんね ・話をするのは、飽きた。結局、私が使えるんだもん ・私がつくって、J児ちゃんが使えばいい ・困ったな、やっぱり使いたいし ・先生についていったら、りぼんがもらえるかもしれない ・ついていっても、先生はおれてくれないな ・遊ぶ時間がなくなっていきそうだ ・遊ぶ時間がなくなるから、もうやめた	・先生も思い通りにならないということ

○R児の育ちについて

R児は本事例のような物の取り合いを何度も繰り返してきているが、ゆずったり、交代で使うといった折り合いをつけていくことがなかなかできない。トラブルを周りで見ていた幼児らが話を聞いて仲介をしたり、諌めたりするのだが、やはり自分の思いを通そうとする。それは家庭で物を取り合って我慢したり、譲ったりする経験が圧倒的に不足していることにも原因がある。R児にとって両親、9歳離れた兄はいつも自分の思いを叶えてくれる人となっている。

○環境の構成について

本事例のトラブルは青いりぼんが1つしかなかったことで発生した。また、R児もJ児も青いりぼんが園内に1つしかないことがわかっていたために、互いに向き合うしかなかった。

保育室にはレストランやさん、おうちごっこコーナー、製作コーナーなど楽しい遊びの場が設定されている。各場所では幼児らが群れて、楽しそうに遊んでいた。その環境があったからこそ、教師について歩いているうちに青いりぼんでいざこざを起こしていたことを忘れ、楽しい遊びに目が向いていったのだと考えられる。

○教師や友達のかかわりについて

周囲にいた幼児らの考えを受け入れることもなく、二人で解決策を見いだせずにいた。R児とともに保育室内の中を見てまわったことによって（R児は青いりぼんが気になり、教師についてきたのだが）気持ちが切り替えられたと考えられる。また、楽しそうに遊ぶ友達の姿を見て、青いりぼんよりも楽しく遊ぶことに自分なりの価値を見いだしたのではないだろうか。

○今後に向けて

これまでR児にとって必要なことは時には我慢することだと思い、かかわってきた。本事例でもそれをねらってかかわったのだが、結果的にR児にとって有利な援助（気持ちの切り替え）となってしまった。

今後、がまんせざるを得ない状況にもっとR児を追い込み、友達の思いと自分の思いを考えて葛藤する機会を保障していきたい。

事例6「夜になるまで貸してあげる」（4歳児）　　2月15日（木）

おうちごっこのコーナーで、X児が教師の方を見ながらうかない顔をしている。教師はX児がうかない顔をしているのは、R児にスカートを貸してもらえなかったからだということを知っていた。R児は鼻歌を歌いながらスカートの1つを身につけ、もう1つはバックの中に入れていた。

教師　「X児ちゃん、R児ちゃんにスカートを貸してほしいってお願いしていたね。でも貸してもらえなかったのね」
X児　「（うなずく）」

近くで遊んでいたE児が寄って来た。その姿を見たR児が

R児　「B児ちゃんも2つスカートもっているよ。B児ちゃんから借りたらいいんだよ」
教師　「B児ちゃんにお願いしてみる？」
X児　「（顔を横にふる）」
教師　「いやなんだ。どうして？」
X児　「これが（R児がもっている白のスカートを指差しながら）いい」
教師　「なるほど、R児ちゃんがもっている白のスカートがいいんだって」
R児　「R児も使うもん」
教師　「今使っているのは、緑のスカートでしょ。白のスカートはバックに入ったままだよ」
R児　「このスカートはパジャマなの。夜になったら着替えるんだよ」

X児はますます困った顔になった。

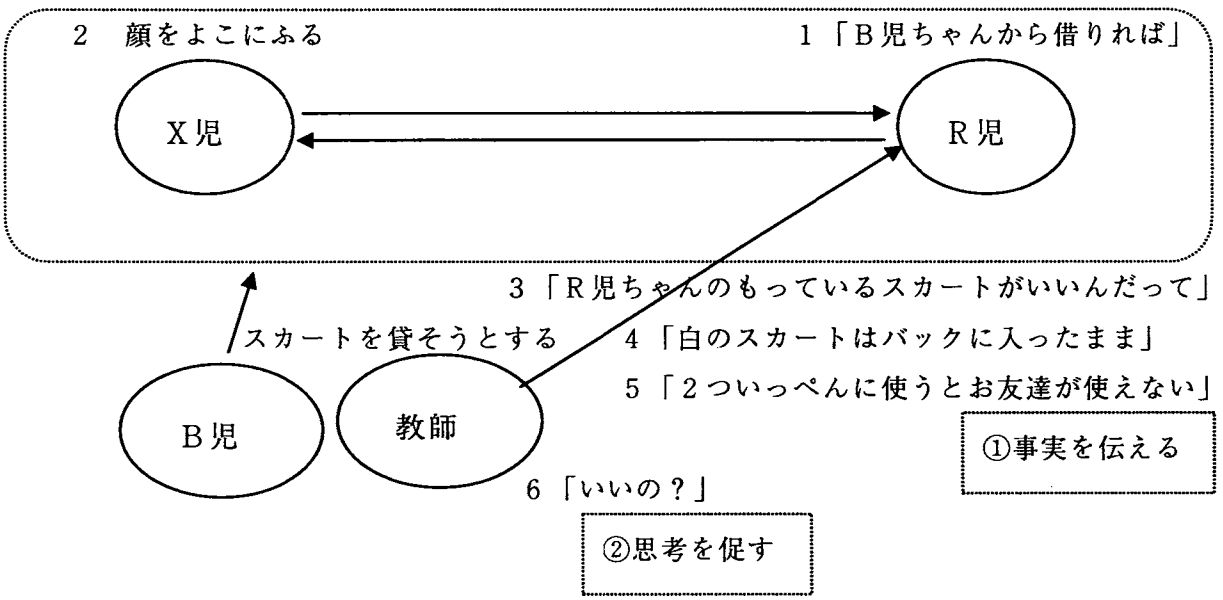
教師　「R児ちゃんのお話はわかりました。でも、スカートを2ついっぺんにもっているとX児ちゃんのように使いたいなと思っているお友達が使えないよ。いいの？」

このやり取りを見ていたB児が2つもっていたスカートのうち1つをX児にさしだした。X児は受け取ろうとしない。

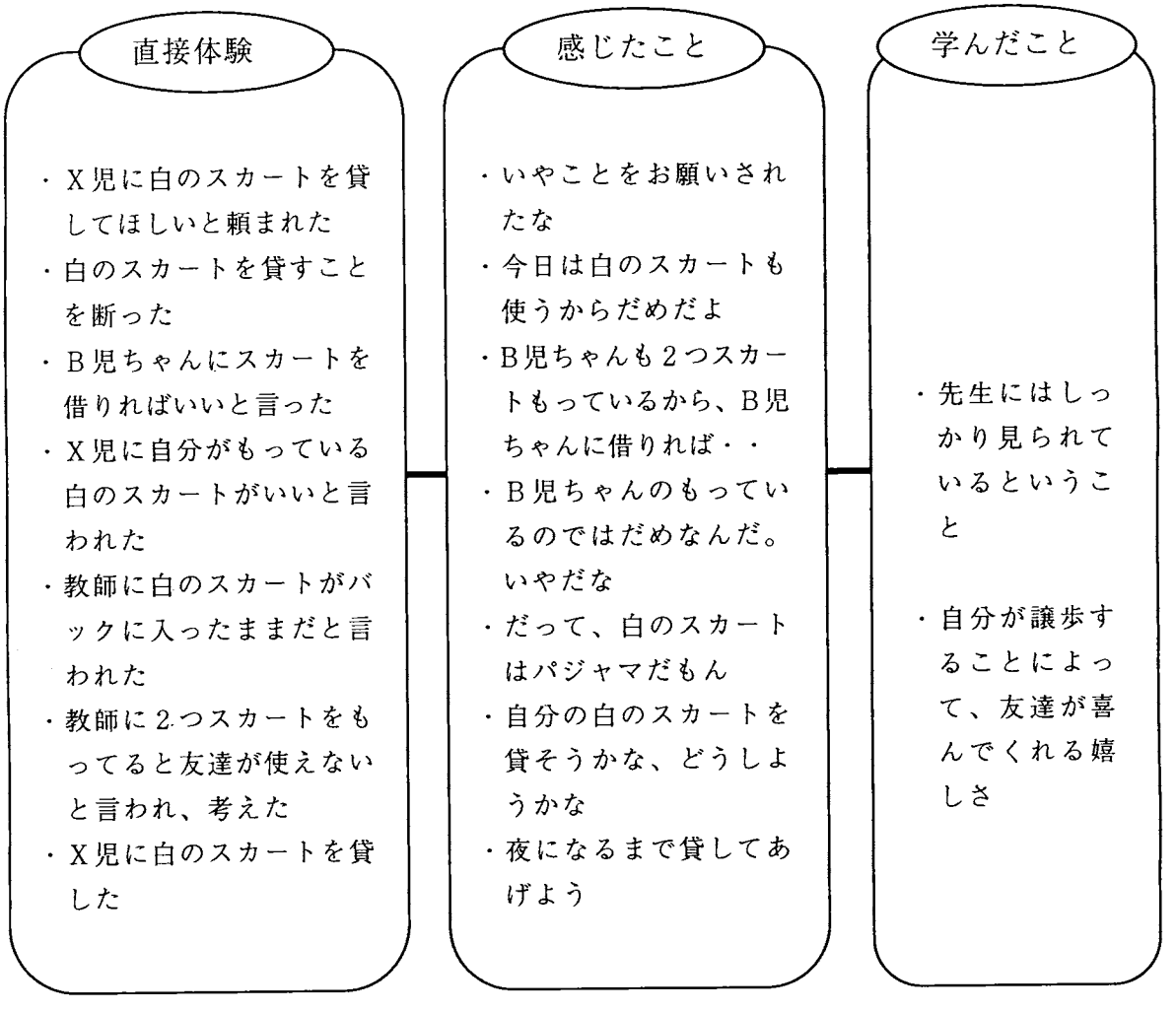
教師　「X児ちゃんはやっぱりR児ちゃんがもっているお花がついた白のスカートがいいのよ」

R児 「じゃ、夜になるまで貸してあげる。夜になったら着替えるから、返してよ」
X児は「ありがとう」と言ってにっこり笑い、R児と一緒におうちごっこを始めた。
その後、楽しそうに二人で遊び、夜になるとスカートを交換していた。

＜かかわり＞



○社会的側面の学びの様相



○R児の育ちについて

R児はいつも自分の思いを押し通そうとしがちである。また、自分にとって都合が悪いこととは向き合おうとしないことが多い。本事例においてもスカートを貸してほしいと思っている友達の気持ちを知っていながら、自分がスカートを譲らなくてすむ状況をつくりだそうとしている。しかし、教師がR児の思いとはちがう状況を知らしめていくことによって、スカートを譲らざるを得なくなった。この過程でR児は自分自身と葛藤し、最後には彼女にとって最大限に譲歩できるところで自分と折り合いをつけることができたと思われる。

○環境の構成について

この時期は表現会が終わったばかりで、劇で身につけていた人魚のスカートや乙姫のスカートを着て、踊りたいと思っている幼児が多かった。この日もいつもスカートを身につ

けてお家ごっこをしていた女児のほとんどが人魚や乙姫になりきって踊りのコーナーで遊んでいた。そのような状況であったため、R児は好きなスカートを自由に使える環境にあったといえる。

さらにX児は飼育当番だったため、遊びはじめるのがR児よりも遅かった。いつものようにR児より早く着替えを済ませ、すぐに遊び始められる状況だったら、このようなスカートの取り合いはおきなかったと思われる。

○教師や友達のかかわりについて

これまで教師は物の取り合いになった場合、R児が時には友達に譲ったりすることができるようになってほしいと思ってかかわってきた。近くにいた幼児をまきこみながらトラブルの状況を確認したり、解決する方法を一緒に考えてきた。しかし、R児は友達の思いを知っていながら、自分の思いをめいっぱい押し通そうとする。そこでH児の思いを代弁し、それをR児に問うていくことによって、R児が自分が最大限に譲れるところまで譲歩できたと思われる。

また、自分が少し譲歩することによってX児が喜んだので、後にスカートを交換することができたのではないだろうか。

○今後に向けて

まだまだ友達との話し合いだけでは、自分の思いを通そうとしがちである。しかし、教師が仲立ちをしながら、R児にめいっぱい譲歩せざるを得ないような状況をくりかえし体験させることが大切だと思う。また、本事例のように友達に譲ることによって、自分も少しよい思いをしたという体験ももっと必要だといえる。

１年を振り返って　～R児の姿から～

環境の構成

- スカートを使う幼児が少なく、R児が自由に使える状況
- R児が使いたいもの（青いリボン）が１つしかない状況
- R児が使いたいもの（泡立て器）が１つしかない状況
- 同じアイテムを媒介にして、遊びのイメージが共有できる場
- 気の合う友達と隣り合って座ることができるテーブル
- 遊びの場の限定（室内のみ）

R児の育ち

- 友達の気持ちを考え、自分ができる最大限の譲歩をする
- 早く気持ちを切り替えて遊ぶとやはり楽しい
- 違う道具を使って、我慢する
- 自分の心と向き合い、折り合いをつける
- 自分も友達も満足できる方法を考える
- たたき返さないで、我慢する
- 友達の提案を受け入れ、折り合いをつける
- 客観的に事実を受け止める

R児の社会的側面の「学んだこと」

- 自分が譲歩することによって、友達が喜んでくれる嬉しさ
- 先生にはしっかり見られているということ
- 先生も思い通りにならないということ
- 自分が使いたいと思っていても、使えない時があること
- 自分の思いと友達の思いを叶えること
- 友達の提案を受け入れること

・自分の思いのみをおし通す
・思い通りにならないと手が出る

教師や友達のかかわり

- 友達が喜ぶ　評価
- R児自身に考えさせる　委ね、思考を促す
- 事実を客観的に伝える　状況や友達の気持ちと向き合わせる
- 気持ちを切り替えさせる　トラブルの発散
- 解決策を考えさせる　思考を促す
- 仲直りのアイディアの提供（U児、M児、H児）　第三者のかかわり
- 使う目的をはっきりさせる　使う目的の意識化
- その場を離れる　自分の心と向き合わせる
- 別の道具を貸す（H児）　第三者のかかわり
- うなずき、R児の思いを受け止める　共感する
- 解決策を考えさせる　思考を促す
- 気持ちを代弁する　共感する
- その場の状況を伝える　事実の確認
- 座り方を考えたことを評価する　評価
- H児が座り方を提案する　切り替える
- 座り方を考えさせる　思考を促す
- トラブルに至った状況を確認する　事実の確認
- 一緒に考え、解決策を提案する（T児、Y児）　第三者のかかわり
- 解決策を考えさせる　思考を促す
- トラブルに至った状況を確認する　事実の確認

教師の願い
・友達の気持ちも考えられるようになってほしい
・時には友達に譲歩できるようになってほしい

＜一年を振り返って＞

（１）Ｒ児の社会的側面の「学んだこと」と育ちについて

・４月当初、Ｒ児は自分の思いばかりをおし通そうとし、友達とトラブルになることが多かった。自分の思いを優先して無理矢理、友達から物を取ることもたびたびあった。そのような場合において、教師はＲ児の思いと友達の思いを聞いたり、トラブルに至った状況を丁寧に確認したりする場を設けてきた。自分と友達の思いを公平に聞く教師の姿から、Ｒ児は自分と同様に友達にも大切にすべき思いがあることを学んだだろう。また、トラブルに至った状況を客観的に受け止めることができるようになったと考える。

・Ｒ児はトラブルを解決するにあたって、自分にとって都合がよい方法ばかりを考えようとする。したがって冷静にトラブルを見ていた第三者の意見は欠くことができない。まわりでトラブルを見ていた幼児らは解決する方法をいろいろ提示した。それらはＲ児の思いと友達の思いを公平に考慮したものであったが、Ｒ児にとっては自分の思いが全て反映されたものとは言えず、**自分の思いどおりにならない**ことを学ぶきっかけとなった。提示された方法をＲ児自身が納得して選択する、さらにそのような経験をいかしてＲ児自身が解決法を自ら考えていく段階を通して、自分の思いと友達の思いの両方を斟酌し、葛藤することができるようになってきたと思われる。葛藤の結果、友達の思いも受け入れて我慢するという選択、自分の思いも大切にしながら最大限の譲歩するという選択が可能になったと考える。

（２）Ｒ児の学びを支える環境の構成と教師や友達のかかわり

○環境の構成について

・学年当初は２年保育と３年保育が融合するため、幼児みんなが安心して生活できることを第一に考え、環境を構成した。それ故、**遊びの空間を室内に限定**し、年少から親しんでいる遊びのコーナー（ままごとコーナー、製作コーナーなど）を設定した。遊びの空間を室内に限定することは戸外よりも遊ぶ空間が限定され、幼児同士がかかわる度合いが高くなる。と同時にトラブルが生じることも多くなる。このように遊ぶ空間を制限することは、意図的に幼児ら同士のかかわりを生じさせるのに必要な環境の一つだと言える。

・イメージを共有して遊ぶ姿がよく見られる頃、幼児が遊びの中で頻繁に使う**道具の数を精選**し、環境を設定した。すると遊びのコーナーに集まってくる幼児の数に対して、道具の種類及び数が少ないと取り合いになることが多々ある。お互いの思いを出し合い、解決に向けて話し合うといったかかわりを求めるならば、道具の数を意図的に減らすことも必要な環境であるといえる。

○教師や友達のかかわりについて

・Ｒ児は自己主張が得意な幼児といえる。しかし、Ｒ児の自己主張は自分の感情だけに基づいているため友達に受けいれられにくい。したがって、**事実を確認**し、トラブルに至っ

た状況や友達の思いを知ることが必要である。その結果、R児は自分の気持ちをひとまず置いて、状況を客観的に捉えることができるようになってきた。また、友達の思いと自分の思いの狭間で葛藤できるようにもなってきた。自分の思いにがんじがらめになって、その観点からしか状況を捉えていない幼児にとって、このようなかかわりをくりかえし行うことは多角的に物事を考える姿勢を育てるために必要である。また、自己抑制をしながらの自己主張は友達に受け入れられ、友達との関係を深めていくことになるだろう。

・トラブルを解決していくにあたって**第三者の意見**を聞くことも必要である。なぜなら、自分の感情にふりまわされている幼児にとって、解決方法を見いだせるような余裕はない。また、R児のように自分の気持ちに折り合いをつけていくような経験が乏しい幼児にとっては、自分の思いと友達の思いにも配慮した解決方法が思いうかばないことも考えられる。そのような幼児にとって第三者の意見を聞き、その中から自分が納得した方法で解決を試みることは将来、自分で解決の糸口を見いだしていく姿勢を育てるために必要な経験だと考える。

・自分の気持ちに折り合いをつけたり、自分ができる最大の譲歩をすることによって認めてくれる友達の存在が大切である。同様に折り合いをつけたり、譲歩できたことを認める教師のかかわりも大切である。このように友達、教師によって**評価**されることは幼児自身の学びを確かにしていくと思われる。